

マーガレット・アトウッドの児童書における「サバイバル」の意義

風早 由佳

はじめに

カナダを代表する作家の一人である、マーガレット・アトウッド(Margaret Atwood 1939-)は、詩や小説以外にも、子ども向けの絵本の創作においても多作な作家である。これまでアトウッドの詩や小説における先行研究で議論されてきたように、また彼女の評論集『サバイバル』(Survival 1972)が示すように、「生き残ること」(survival)はアトウッド作品においてジェンダー問題と結びつきながら非常に重要な意味を示してきた。本発表では、これまでほとんど議論されていないアトウッドの児童書を取り上げ、その特徴的な言葉遣いと構造を分析しながら、一般読者向けの詩や小説と同様に、児童書においても「生き残ること」が一貫してアトウッド作品を特徴づけるテーマであることを明らかにする。特に、*Rude Ramsey and the Roaring Radishes* (2003)を中心に取り上げ、その特徴的な文体、構造を分析しながら、主人公たちがそれぞれの抱える問題に向き合う中で、それぞれの世界で「生き残る」ために成長していく「カナダ文学」としての特徴を備えた作品として読み解く。

I. アトウッド児童書の特徴

アトウッドは1978年に自ら挿絵もつけた *Up in the Tree* の出版を始めとし、6冊の子ども向けの絵本を出版している。1995年に出版された *Princess Prunella and the Purple Peanut*、2003年出版の *Rude Ramsay and the Roaring Radishes*、2004年出版の *Bashful Bob and Doleful Dorinda* はそれぞれのタイトルからもわかるように、主人公の名前と響き合う頭韻が物語すべての文章に取り入れられている。本発表で主に論じていく *Rude Ramsay and the Roaring Radishes* (以下、*Rude Ramsay*) では、“Rude Ramsay resided in a ramshackle rectangular residence with a roof garden, a root cellar, and a revolving door.” (2)と語られ、Ramsayの“r”音が繰り返し用いられている。本発表では、*Rude Ramsay*について音の特徴に注意を払いながら、物語に度々取り入れられる円環のイメージとそこからの脱出を企てる中で主人公の成長に焦点を当てて分析する。

II. アトウッド作品に見られる言語的特徴と円環のイメージ

*Rude Ramsay*においては、そのタイトルが示すrの頭韻が連続することによって、作品全体には終始うなるような(roaring)力強い低音が鳴り響いている。そしてこのrの音の連なりは、作品の構造、及び主人公 Ramsay の家にある“revolving door”(2)が象徴するように、円環のイメージと重ね合わされながら作品全体を包み込む象徴的な音として提示されていると言える。物語を確認しながら音の特徴と円環イメージの関連性について探ってみよう。

II-1. Rude Ramsay の連続する r 音と円環のイメージ

主人公 Ramsay は、ルーフガーデンと地下室、そして回転扉のある今にも崩れ落ちそうな家に住んでいる。この家の右手には城壁(rampart)があり、“A rampart ranged down the right-hand side of the run-down real estate.” (2)と描写され、同じr音で語られることがかえって「遠くまで続いていく城壁」(“A rampart ranged down”)の堅牢さに対して、Ramsayの「家の脆さ」(“run-down real estate”)を印象付けている。ここに暮らす赤毛のRamsayは「不快な親族」(“revolting relatives”)であるRon、Rollo、Rubyと暮らしている。ここでの親族“relatives”は、revoltingと形容されており、revolving(回転)とも共鳴する。彼らの食事もr音のつく“roasted rice”や“raisins”にはじまり、“rhinoceros”や“rolled out reptiles with a rolling pin”などが使われており、それらは“The reptiles were still writhing, the rhubarb was runny, and the reindeer rinds were rotten.” (3)といった「不快」なものであることが語られる。ただrの頭韻を重ねるだけでなく、rhinoceros[rainɔːsərəs]、writh[ráid]、rind[ráind]にみられる[rai]の音を定期的挿入することによってリズムの統一感を生み出している。

Ramsayはこうした食事に対して抗議するが、親族からは非難される。Ramsayは同じr音を名前を持つ親類の中にあっても、彼らのrの音にあふれた不気味な食事を否定し、また冒頭で説明されていたように他の“rotund but robust” (2)と形容される親族とは違い、俊敏さも備えた異質な存在であることが明らかにされる。そして、この親族からの逃亡の描写においても、また“round and round the revolving door” (2)と説明されるように回転扉をぐるぐるともわる大騒ぎにおいても回転、円環のイメージが用いられている。

Ramsayの家の様子を城壁の上から見物していたみずぼらしいカラスがRamsayに声をかけることによって、

Ramsay に転機が訪れる。カラスは「城壁の向こう側へいったらいいのでは」(“You might rove to the other side of the rampart. 7)と誘う。唯一の親友であるネズミの Ralph の助けもあり、ここから Ramsay はこれまで閉じ込められていた円環から脱出するのである。また、城壁の反対側へつながる穴の場所を教えてやる Ralph は、しり込みする Ramsay を励まして “Rise to the occasion, [...] Resist restrictions! Be rugged!” (7) と声をかけており、r 音の制約にも抵抗せよと促しているかのようである。しかし、r 音を多用した発話からは未だ r の制約の中にあることがわかる。

壁の向こう側で出会った少女 Rillah は、噂で Ramsay のことを既に知っており、自分の置かれた状況と Ramsay の状況を対比して “the reverse of yours” (17) と語る。不快であったとしても親族のいる Ramsay に対して、Rillah は、見かけは洗練された暮らしをしていますが、不正を働く正直さを欠いた親族がいると告白する。そしてそのことに「抵抗し続けてきた」(I had been rejected 18)と語る。そこで Rillah の住む家を探検すると、盗まれた文書や偽のロココ作品など、Rillah の親族の不正が次々に見つかる。こうした不正を綱渡りで行って来た親族たちとは娯楽に興じるということがなかった Rillah の “How I would relish regarding a real rumpus!” (19) という言葉を聞いて、Ramsay、Rillah、Ralph は再び城壁に空いた小さな円天井の穴を通して Ramsay の家へと戻る。そして Rillah に “rampus” (大騒ぎ) を見せるために、Ron、Rollo、Ruby にわざと暴言を吐き、上へ下へのドタバタ劇を巻き起こしてみせる。

“rampus” に満足した二人は互いの持つもの、すなわち赤鼻赤ら顔のネズミ、噛みつくラディッシュ型のロボットについても認め合い、城壁の上に住む動物たちにも見守られながら、二人と一匹は再び城壁の穴を抜けて反対側—Rillah の住む方の世界へと行き、バラの花が咲くところ、さざめく川のほとり、輝く虹の下を跳ねまわっているところで物語は終わる。

城壁の穴を抜けて元いた世界へと円環運動的に帰着したかと思われた Ramsay の行動は、再び城壁の反対側の世界へと抜けていくことによって、物語の終わりと共に円環運動にも終止符を打っているように見える。

II-2. *The Circle Game* (1964)における円環のイメージ

Rude Ramsay において確認できた円環のテーマは、詩集 *The Circle Game* (1964)を中心に、アトウッド作品において重要な意味を持ちながらこれまでも描かれてきた。表題詩 “The Circle Game” において “The children on the lawn / joined hand to hand / go round and round” (ll. 1-3)と書き出され、この後に続く連でも “going(go) round and round” のフレーズが繰り返される。子どもたちが手に手をとって「かごめかごめ」の遊びの通りにただ回り続けることこそが重要なのだと述べられ、堂々巡りの円環が表現されている。しかし、この詩は同じ場所で回り続けることで円環の中に閉じこもる様子を描く一方で、最終連では、“I want the circle broken.” (41) というように、その円環を破壊することへの願望も描かれている。ただ回るということに囚われた無意味な繰り返しの円環運動に変化を求めているのである。

本詩と同様に、*Rude Ramsay* の Ramsay と Rillah も、これまで暮らしてきた世界の円環の中から互いの出会いによって飛び出そうとしていると言えるが、最終的に円環を破壊できたのかは定かではない。ただ、円環からの脱出、円環を壊すという地点にたどり着いた言うことはできる。それは、アトウッドが『サバイバル』において示す「犠牲者」の分類を当てはめて指摘することができる。

III. *Rude Ramsay*にみるカナダ的「犠牲者」

Ramsay の逃亡における大騒ぎは “Rude” Ramsay が食事に抗議したことから始まるのに対して、親族が走り出した Ramsay を追いかける描写では、“rushed after Ramsay”のように “Rude” が消えており、親族と暮らす空間からの脱出によって Ramsay が変わりゆくことが示唆される。このように、巧みに r を語頭に持つ語を繰り返し続けることで、音の面白みを生み出して作品に軽妙さを与えると同時に、Ramsay 一族の名前が持つ r という音に引き寄せられる r を持った数々の言葉によって世界が創造されており、名前のもつ音という変えられない状況とそれが引き寄せる環境という不可避の運命に縛られ翻弄される犠牲者の姿を浮かび上がらせている。

こうした Ramsay と親族の暮らしぶりから、それぞれの人物について、アトウッドが『サバイバル』で示した以下の4つの犠牲者の分類を当てはめて考えることができるだろう。

Position One: To deny the fact that you are a victim.

Position Two: To acknowledge the fact that you are a victim, but to explain this as an act of Fate, the Will of God, the dictates of Biology (in the case of women, for instance), the necessity decreed by History, or Economics, or the Unconscious, or any other large general powerful idea.

Position Three: To acknowledge the fact that you are a victim but to refuse to accept the assumption that the role is inevitable.

Position Four: To be a creative non-victim. (46-49)

Ramsay の親族 Ron、Rollo、Ruby は「自分が犠牲者であることを否定する」(To deny the fact that you are a victim.)という第一の立場にいるだろう。自分たちが持っている特権を失うことを恐れ、犠牲者であることを認めず、グループ内の残りの人々が不利な立場に甘んじなければならぬことに対して、理由を何とか説明することにエネルギーを費やすのである。アトウッドが説明するように、Ron、Rollo、Ruby のような「立場一の犠牲者たちが怒りを覚えるとしたら、それは自分の仲間の犠牲者たちに、特に自分が犠牲になっている事情を話そうとする者たちに向けられる」(If anger is felt by Victims in Position One, it is likely to be directed against one's fellow-victims, particularly those who try to talk about their victimization. 46)のである。

これに対して、Ramsay は第三の立場、すなわち、「自分が犠牲者であるという事実を認めるが、その役割が避けられないものだという前提は甘受せず拒否する」(To acknowledge the fact that you are a victim but to refuse to accept the assumption that the role is inevitable. 48)という姿勢をとる。そして、この第三の立場は、アトウッドもそれが「動的な立場」(dynamic position 48)だと説明するように、一歩進んだ第四の立場「犠牲者ではなく創造的な者であること」(To be a creative non-victim)という立場へと進むか、反対に自分の中へ閉じこもって置かれた状況に留まるのであれば第二の立場の犠牲者へと逆行することもであると指摘されている。

Ramsay は revolving、そして城壁が象徴的に表す円環から脱出し、Rillah という理解者、協力者を得たことによって、第四の立場の「創造的な者」として、壁の向こう側で新たな一歩を踏み出した。しかし、アトウッドは決して彼が完全にそこに安定したというところまでは描いておらず、元の世界へと通ずる穴は残されたままである。異世界へと誘ったカラスの言葉の信ぴょう性も疑わしいままであることは、Ramsay、そして Rillah の未来、すなわち生き残りに関してはまだこれから彼らの手で道を切り開いていかねばならないことを示唆しており、円環からの脱出は、犠牲者が創造者として生き残る物語の始まりでもあることをオープンエンディングによって示しているのである。

おわりに

本発表では、アトウッドの児童書 *Rude Ramsey and the Roaring Radishes* を取り上げ、物語全体を r の頭韻を持つ語の連続で構成するという特徴的な言語使用、また「円環」が物語の構造に取り込まれている点を指摘した。そして、それぞれの登場人物をアトウッドが『サバイバル』で示したカナダ文学を特徴づける「犠牲者」の立場の分類にあてはめることで、主人公 Ramsay が円環から脱出し、第三の犠牲者の立場から第四の立場へと移行していることを明らかにした。

円環からの脱出、円環の破壊というテーマは、すでに詩集 *The Circle Game* の表題詩にも描かれていたが、*Rude Ramsay* では、その願望を達成するための一つの手段が示されたと考えられる。すなわち、似た立場に置かれた者、アトウッドの犠牲者の分類では「第三の立場」にいる者との共感、理解、協力を通して、円環の破壊とその後の新たな世界の創造、そこでの生き残りの可能性が見えてくることが示されている。

アトウッドの児童書 *Princess Prunella and the Purple Peanut*、*Bashful Bob and Doleful Dorinda* においても同様の特徴的な言語使用に加え、*Rude Ramsay* の分析で明らかになった「生き残り」が重要なテーマになっていると言える。これら児童書のさらなる分析を通して、「生き残り」ことの意味と、アトウッドのカナダ文学観を明確に浮かび上がらせることが可能になるだろう。

参考文献

Atwood, Margaret. *The Circle Game*. House of Anansi, 1966.

---. *Princess Prunella and the Purple Peanut*. Barefoot Books Ltd, 1995.

---. *Rude Ramsey and the Roaring Radishes*. Bloomsbury Childrens Books, 2003.

---. *Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature*. 1972, A List, 2014.

Muller, Klus Peter. "Re-Constructions of Reality in Margaret Atwood's Literature: A Constructionist Approach." *Margaret Atwood: Works and Impact*, edited by Reingard M. Nischik. Camden House, 2000, pp. 229-58.